晴

天

八山賛夫兄

この詩篇が兄の温かな情の結晶にでも
報ひられれば幸ひである

一九三〇・一〇・一九　秋谷豊

豊

詩集・晴天

佐藤一英著

79
2

「晴天詩集」の序文として

佐藤一英君　私は君の詩集に序を書くことを欣快とします その理由を述べる必要から君が今夕私に與へた手紙の重なる部分を引用することを許して下さい。君の手紙は言ふ―

『私はいま、"貴方"と最初で、また一度きりの貴方との會談の夜を思ひ出します。貴方は下戸塚の藤森のわび住ひの一室で、海底の魚が上層にたゞよふ光をしたひ、あほぐやうな眼差をもつて「僕は地上のことを考へるより天上のことを思ふことの方が愉快だ、そんな男にできてゐる。」とお言

ひだつた。それだけがはつきりと空間に浮んで見えます。私も「そんな男にできてゐる」のです。ただそれだけの理由で私に、私の近刊「晴天詩集」の序文を書いてくれませんか下さるものと信じます。』

私は先づ君の卒直な言分をうれしく思ひます。且つ或る瞬間に私の口から洩れた言葉が、君の心のなかにそれほど永く殘されてゐたといふ事實を知ることは更にうれしいことです。世にはこゝろを込めて誓つても消えて仕舞ふ言葉もあるのに、また同じ世に、ただ己れの感興のまにまに自分自身を述べたいといふ欲望から、別にそれほど相手を氣

にも留めずに言つた言葉が、消えずに君の心に殘つてゐたこの事實をうれしいと言はずには、人の世で何をうれしいと呼ぶべきであらうか。尙もその上に君は『ただそれだけの理由で』私に序を書けと言ふ。『ただそれだけ』―然もこれだけの理由さへあれば人にものを頼むには充分である。君が信じた通りに私が今、氣輕に欣然としてこれを書く所以である。

實際私は「地上のことを考へるより天上のことを思ふことの方が愉快だ、そんな男に出來てゐる。」しかし、それは私が、必ずしも強い意志を抱いて不斷に現實を粉碎しつゝ

高い理想に猛進するの人であるからではなくして、逆に、あまりに弱い意志に依つて、身のまはりの地上に、いつも非運を呼び起す靈で私があるからである。『私も「そんな男に出來てゐる」のです。』といふ君は、果してどの意味で天上を夢みる人なのであらう。願はくば私自身の如くでは無くあれ。君自身が私に就いて言つたごとく『海底の魚が上層の水に漂ふ光を慕ひ仰ぐ』やうであれ私自身に就いて言へば私はただ淺い泥溝にゐる水蟲が喘ぎ喘ぎ水に浮んだ星影にしたひ寄るやうな者に過ぎまい。—詩人佐藤一英君、君は私が常に私自身をのみ語りすぎることを許して、これを君の詩集の序としてくれることを信ずる

私は君の「晴天詩集」が世に出ることを樂しんで待つものです

大正十年六月十一日夜

東京青山にて

佐藤春夫

野の妻におくる歌

老

僕のかゝる椅子はゆれる
梯子のやうに、船のやうに

僕の髭にかゝれる塵
白し、帆のやうに

僕は老ゆる
眼瞼(まぶた)の陰の海のやうに

水上の滿月

滿月よ　お前はひと夜
こつそりと
流れ靜かな水の上に横はる
搖籃で搖られる
みどり兒のやうに

と忽ちお前の姿は消える
忽ちお前は何處からか

白い可憐な掌を出す
うら若い母の胸をかいなでる
みどり兒のやうに

掌はうごく白くちらちらと
そのてのひらは或るときは
大きな乳房にふれるけれど
無心に腋にすべり落ちる
ああ可憐なる水上の滿月よ

酒

毒よりもなほ恐ろしく
血よりも陰氣な黄ろい酒よ
だが己みがたく杯を擧げる
地獄の底にあらしを斷えず聞きながら

僕をあはれめ、やさしい友よ
僕には語るな、雨に折れた薔薇の姿を
飛び散つた扉の行衛を

また病む、僕の父母を

濺げよ、妻よ、あつい涙と最后の酒を
冷たい床に僕は坐つて
纔かに白い冬の光と
「罪」とを共に飲まふ程に

ああ落ちよ、靜かなる眠りの翼よ
わが唇が砂のやうに乾く前に
闇よ、とざせよ、墓の戸口を

僕と「記憶」を封ずるために

故郷へ

僕にはもはや慰めでない、酒も歌も夕暮れも
四月の空は暮れかかる、僕は書齋にかへつて行く
灯がついた、虚の花瓶にすつかり塵がかかつてゐる
その青磁に映つてゐるのは「秋」と「冬」との光ばかりだ

妹よ、僕はもう故郷へ歸つて行かうね！
あの大きな癈寺の壁には樂書がのこつてゐるといつたね！
燕らの飛び交ふ檐の、その壁にもたれかかつて話さうね！
樂しかつた昔ばかりを！

寂しい墓

薄のなかに寂しい小さな墓塲がある
たえまもない氷雨に、花はおち莖は傾いてゐる
（その一隅に空虚しい墓穴があつたことを誰が知つてゐたらうか？）
其處の土はたゞ黄ろい入日にのみ温められ
數本の鳥の拔毛に飾られてゐた

薄暗い船室の死の床に、美しい一人のママが臥してゐた

その夜、窓硝子は曇り、ランプは物憂げに搖れてゐた
（この歸りの旅が、冷たい影に覆はれるのであつたことを
誰が知つてゐたらうか？）
小さい娘はママの凍えた手をとり、眠り
次ぎの娘は色褪せた、ママの髪に顔を埋めて眠つてゐた

故郷の館の屋根の上には、その明方に霜が置いてた
大きい娘は、海の虹を胸に描き、眼醒めてゐた
朝日はすでに風見にくだけ、鳥は歌をばはぢめたときに
ほころびかけた唇の微笑みさへが凍つたことを

（彼女自身氣づかなんだに、誰が知つてゐたらうか？）

薄のなかに寂しい小さな墓塲がある
たえまもない氷雨に、花は落ち莖は傾いてゐる
かつて空虛しかつた墓穴に、ママは靜かに眠つてゐるのを
（誰がどうしえようか？）
入日は其處をやはらかに溫め
數本の花が鳥の拔毛にかはつて飾られてゐる

眞珠

私の腕に抱(だ)かれてゐるとき、たまをよ、お前は海のやうだ
私は胸に靜かな靜かな波のうねりを感ずるよ
また心にきくよ、午睡の海のかすかな寢息を

そしてお前の明るい髮は、私の腕に碧空の
夢を卷いて流れるよ、白い渚をゆく藻のやうに

私はそれで醉つて了ふ、そうしてうつらと疑視(みつ)めてゐる

海の底の眞珠が光るを、貝のやうな眼瞼の陰に！

冬

翼折られた鳩かとばかり枯れた梢の半月よ！
山裾に白き牙をむき笑ふ雪の一つらよ！
われは烏、泣きさけぶ曠野の空をつき進む！

扉

僕の脊には白い月、續く石階
前には扉、枯枝のみだれる影と僕の影

（ああこ宵、僕は破れた垣のくひにも異らず…）

その折君は妹のためにジャケツを編んでゐたであらう
君は針持つ指のひまから幸福が消えて行くのを見なんだか
古びた額から夕日のいろが消え去るやう

僕はその夜、君に會はずに家に歸つた
歸り路に僕が投げた水仙は流れに冬を死んだであらう
僕が觸れた扉のひきてに翌朝君は粗くふれたことだらう！

亡い母に――

墓の底に默せる母よ、冷たい母よ
やさしい哀憐も塞して了ふ一月雲が空にあつても
朝日に輝やく花薔薇がお身の瞳に今搖がぬとは思はれない
死する前の熱い涙は凍る闇にも顫ひ咲く光の花であつたのだから
散らぬ凋まぬ花だつたから

墓の底に默せる母よ、冷たい母よ

力強い情熱の翼さへ折る、冥まぢりの風が吹いても
可憐な蝶が、お身の口邊に今舞はぬとは思はれない
死する前の細い吐息は花より甘い密が混つてゐたのだから
消えぬ香があつたのだから

わが母上よ、蝶をおくれよ
その雙の翅の上に、夕日と燃える沈默の言葉をのせて
（いま庭に、隅なく氷の影横はり
井戸に水はかれはてゝ、妹は嘆いてゐるのだから）

わが母上よ、薔薇をおくれよ
その葉の陰に、瞳と耀く燭を添えて
（いま窓に、嵐はせまり
燭台の倒れた傍、妹は祈つてゐるのだから）

わが母上よ、しのび來れよ
底知れぬ墓穴をいて
（いま窓の内、闇は下り、時計はとまる
ひとり空に月は刃のやうに輝く）
その冷たい光をともなひ

眠る妹の床のなかへと辷り入れよ

夢は光の花を開かう、愛は氷の鐘を鳴らさう！

池を去る前に

陽は落ちた、妹よ、白菊の花を捨てよ
遠き丘に落葉せる並木路續く
車はみえず車輪の音のみ、寄り添へよ、妹よ

微風がわたる、光の死んだ池水を撫で破れた蓮の葉を搖り
妹よ、われらこの池を去る前、森の奥なる墓場に行いて
落葉の下に冷たく古き香ある泉を汲まふ！

深淵

この深夜、地は深い淵のやうだ
その底を這ふ貝か、小魚か、私は
手燭を持つて闇の庭をさまよふよ……

（沈默（しじま）を青い闇はかがやく）

忽ちに地はけがされた、一條の不淨の思慕に……
燭は消えた、さびしさに空を仰げは

深い空に銀河は動く……

（こは邪淫の蛇、白い腹をゆすりつゝ這ふ！）

ふるへつゝ南へ南へしたひ行けば
ちらばふ星は亡者らが黑い衣をかつぎつゝ
手ん手にさゝげ、さ迷ふ數多の燭である

（あゝ今宵、空も地も深い深い淵と變つた！）

T　ーに

悲し、悲し、伊吹颪はかの森陰の
池を氷に閉しただらう
君と寄りそひ、もたれた籬の
薔薇を無慘に散らしただらう

さて、どうなつたか、君が密房にて
見入つた君の黑い瞳は？
わが首にみだれた、君の豊かな髮は！

呼きは……！

ああ、いまのわれら二人は
離れればなれの落葉ぢやないか！
夕陽のなかにしばし舞はせよ
よしまた西と東に散るも！

秋

秋風が吹く、大空をまた暗い私の胸の奥を
とある林の枯枝に小鳥はしよんぼり歌も歌はず
そよぐ胸毛に「夏」と「秋」とをちらちらさせて
眞赤に、眞赤に陽が落ちる……

ひねもす私は雨のやうな落葉（おちは）を身に浴び
（埋れた斧は塊（くれ）らうともせず）
道もわからぬ崖にすわつて遠くへ思ひを飛ばせてゐる……

ああ故郷の古びた大きい家の窓
わが妹の暗い顔――
おゝその澄んでる瞳には冬の湖さへ映つてゐる
たまを、よ、雨戸をすつかりしめて暖爐をおこせ
また休んでゐる時計にねぢせ！……

さて夜だ私は林に深く這入らう
そして死んだ「昨日の花」と枯れた「秋」とを灰となし
焚火の影に池の水面に獨りの影をうつしつゝ夜の明ける
まで眺めあかさう！

芬陀利華

夜

部室の燈火(ともしび)かき消えぬ
（家は海の底に落ちたり）
吾れは悲しく頬杖つきて耳を傾く
長き廊下の入口に「暗黒」とまた「痴愚」との乱れたる足
音起る……

心はおびゆ、雛鳥のごと
明るき智慧は吾れをば去りぬ

ああ神よ、心を何處にかやるべき
われの胸は癈寺のごとく
倒れかかる肋骨を撫でて
冷たき風「死」の香をば撒じぞ過ぎる……

六月の窓

平和なる夕日樹の間を朱に染むるとき
濃き淡き影みだす若葉のなかに
夢多き暮春の薔薇を盛る杯を擧げよ

青き空より「夏」は微風とともに降りて
杯のなかに「六月」を呟き
窓開きし書齋の鏡のなかに
柱暦の赤き〝30〟をば翻さん

かかる時、君に惱みのなほありや
君は聞かん、梢のやさしき小鳴りを
また君は見ん、花影を行く鷄の鷄冠に
嚴かにまた靜かにも落ち行く入日の赤き姿を

冬の雨

冬枯れの庭に雨降る
枝を打つ雨の音をきけ
何處にか人あり隱れ
礫うつそれにも似たり
冬枯れの庭に雨降る
背向けまた背向け
大理石に人散りしきて

「老の顔」刻めるごとし
庭に降る雨ききをれば
大寺の裏山蔭に
白骨の崩れ行くごと
わが骨の破るるごとし
戰きつ雨ききをれば
いちはやく生きのわが身に
めぐらせる白木の箱よ
こは柩、釘や打つらん響ぞ悲し

香爐

妹よ、窓をひらけよ
彼方には夕日にかげる森蔭の沼
浮草の花、夢と浮び
靄は罩める、木立ちから沼の面まで
そのあたり、亡き人の幻はさ迷ふ
窓を閉せよ、かくて
古びたる香爐をささげ、眼とざせば

落葉しげき石垣の外、しのび泣く聲
また暗き敷石の上に
白金の留針落ちる響はきこえん

はかなしや香爐の底に
思ひ出と、眠りとは
白くして柔かき褥をかつぎて臥し
細くして弱き光に、また微かなる物の搖ぎに
物憂げに白く息吐き、ほのぼのと遁れぞ出づる

妹よ、窓を開けよ
月の光は、床の上に砂の如し
かの香爐をほぐらき鏡の前に据えれば
なほ麗はしく亡き人の幻は浮び
浮草の花の薫(かほり)、思ひ出の息、部屋をば滿さん

病める蠶

黑ずみし障子に陽は移り行く、五月末(すえ)の日
暗き日は既に海にありや、風は南より來る

蠶室の蠶、一樣に臥せり、彼等は病めるなり
彼等は知れり、暗き日は既に海にあるを

風は南より來りて、障子に日は陰り
乳母車のなかに赤き苟藥は凋み行く

五月末の冷たき日や、蠶室に蠶は病(あ)めり
彼等は知れり、臺所の水甕に水、惡しく濁れるを

看護(みまも)る人は家にあらず、壁に重き袷はかかれり
土間ほの暗し、惡運ぞ滿つる

一日の終焉

石油燈の灯は亡びんとして
大いなる書物の影洞穴の如くなり
ほの白く浮べる頁の端を
這ふ蟲の羽なやましく光れり

憂鬱なる黑き網
疲れたる腦髓にかかりて
空しき今日の虚僞と涙とほゝ笑みとは

濡細き吐息の下に嘆けり

石油燈の灯は、終に
血の如く赤き一點となり
いつしかに、隅々まで毒草の如き惡臭はひろがる……

忽ちにして、蟲も書物も
限りなき闇の底へと沈みたり……

やがて淵なす闇の底より

なやましき光の大蜘蛛現はれ
黑き網の間より腦髓をつひばみ始む……

思想は嚙みきられ、靈は飛び去りて
黑き屑片は闇と眠のなかを降りて
灰皿の上に音もなく積れり……

雨後

雨去りぬ、雲低く、西の空、一條赤し
灯のうつる人氣なき煤け障子にさも似たり
（床なくて土間の暗きに大いなる猫はかゞむか）

二百十日、河は太る、薄の穗、ほの白く無言をまもる
岸をくだれ、唐黍の半がた傾く蔭に

ふと見出で驚ろかん、人待てるおぼこ娘の面をふせるを

こは雨にぬれ黄ろさ増せる綿の花、あはれゆかしき

ある夕暮

柿の樹の落葉が枝間、せはしげに雲ぞ馳せ行く
夕暮れなり、夕暮れなり

葬ひに母は出拔けて、子供らは村路馳せるか
時折に、肝高き聲わたり來る

子供等よ、とく歸りこよ、雨戸は開きしまゝに暮れたり
白き物影奥より動き悠々と椽より下りぬ

猫なり、庭の暗きに消えぬ寂静さは壺の如し
庭に音あり、小屋より歸る妹か、鍵は鳴れる

七日月、ほの白に雲ぞ馳せ去る、空は病めり
言問はん、井戸端の葉欄にひそむ蝦蟇に
そも何が故、空は病めると

親鸞聖人御逮夜

（ある年、クリスマス、御逮夜、叔父の法會と、三夜くしくも
つづきしことあり、これは、その第二夜の夢なり）

障子戸にしのび寄り、また懸けゆきし
黒き薄衣、何人の來りてなせし

障子戸にしのび寄りては懸けゆける
闇の垂れ衣、見よ壁に星は現はる

―忽ちに部屋は異る宇宙となりし

あなやほ暗きこゝの世界におりてきし
ひとひら小蜘蛛―そは青き木の芽の如し

木の芽より青き手いでて解きがたき心を語る
―おゝ今宵、開山が御逮夜なる

―人もなきこゝの世界に忽ちに讀經ぞおこる

ほがらかな聲を分くればただ一條死者の聲あり
壁の星、落ちもやしぬる一條は死者の聲なり

あなや見る佛壇にみあかしつきて慕ひよる
わがはらからよ、ただひとり死者うちまぢる

源之亜―まこと叔父なる
いつほりし竹に雀よ、土色の横顔にある

こちらむけ、竹に雀ぞゆれしのみ

寄れば姿も消えうせぬ！

冬の午后

村うちは影めぐり影走る落葉の音のみぞ高し
師走なり、日暮れ近か、村を出で北に向はん

宮裏の刈田を歩りく烏のみあやしく光る
ああ光りつゝ一すじに何をかあさる

迫りくる影を知らずや束の間の幸うくる鳥
人として一人寂しや、われは行く影をおひけり

石橋をみよや蔭りてめぐり行く風の白さよ
河施餓鬼、蘇都婆おちて枯笹の翻るのみ

はやもその布は氷らん（一夜また文字封せんと）
人心寒し冷たし消えがてになほ殘る文字

消えがての名號よべば、日は落ちて新月の影
名號の消ゆるは何日ぞ、流れ行く水よ答へよ

註、河施餓鬼とは、娠婦出産の折、死するとき不淨多くして淨土に入る與はずと、乃ち、河中に竹柵を造り名號をしるせる白布を載せ、通行の人の一掬づつ流す水により名號消ゆるの曉、彼女は成佛すといふ、

羅漢堂冬夜

七日月今か落ち行く、天井に近く並べる
羅漢等が姿沈むよ

―闇の海、せり上るごと白き像急ぎ沈むよ
―雪佛、台のまゝなる雪佛、沈み行くなる

忽ちに堂はほこらよ……
壁めぐる廊下の闇よ一條の髪の毛走る

親ともに亡せし心か、執念の髪の身振りよ
羅漢らが足にからまり忽ちにまたかけ行ける

風にのる髪の一條
（そも幾夜堂をめぐれる！）

千切れたる羅漢が手足うちこえつ
さて身ぶるひし身をかへし敷居くづりぬ

註　名古屋東山大龍寺に五百羅漢安置しあり
すでに手足こぼれしもの顔なきものも表はれぬ
傳説にいふこのうちに己れの亡親の顔せしものありと

詩集・晴天　目次

野の妻におくる歌
老……一
水上の満月……二
酒……四
故郷へ……七
寂しい墓……八
眞珠……一一
冬……一三
扉……一四

亡い母に……一六
池を去る前に……二〇
深淵……二一
T―に……二三
秋……二五

芬陀利華

夜……二七
六月の窓……二九
冬の雨……三一
香爐……三三
病める蠶……三六

一日の終焉……三八
雨後……四一
ある夕暮……四三
親鸞聖人御逮夜……四五
冬の午后……四九
羅漢堂冬夜……五一

大正十一年十月一日印刷
大正十一年十月十三日發行

（定價金八拾錢）
（送料六錢）

著者　佐藤一英
名古屋市中區新榮町三丁目
發行者　江崎侃二
名古屋市中區南吳服町二丁目
印刷者　箕浦甚五郎
名古屋市中區新榮町三丁目
發行所　江崎正文堂
（振替名古屋三七二四番）

晴天

一宮市博物館